

子どもたちにとっての課題を援助することのむずかしさ

センター協力研究員（東京都立多摩教育研究所主任） 岡本 淳 子

平成13年度末、所属していた東京都立多摩教育研究所において、教師の抱えるとまどいについて文献研究をした。社会の変化に伴い変容する子どもたちとの出会いの中で、教師たちは子どもたちとの間でうまく気持ちが通じ合わず、それまで築いてきた教師としてのアイデンティティがくつがえされるような苦悩を抱えている様子が浮かび上がった。

教育相談の分野から子どもたちや保護者の変化を思いめぐらすと、子どもが抱える問題は深刻になりながらも、本人自身も、また、家族の間でも、互いに考え合う言葉のやりとりができにくくなってきている近年の状況に気づく。相談担当者としては、親と子どものコミュニケーションをつなぎながら、まず具体的な場面でどんな行動をとっていかを一緒に考え合う中で、親や子どもを育てていくことが増えている。

また、研究活動の中で学校に出向いて子どもたちに行った面接からは、中学生たちが、葛藤は回避して人間関係の和を優先するあまりか、自分の興味や関心についてすら積極的に語る事があまりないのに気づいた。特に、自分自身について尋ねられたときには、「考えたこともないから」と言い訳をする子どもも含めて、ほとんどの子どもたちが「分からない」と答えたことに驚きを覚えた。

学力低下の問題を考えると、このような子どもたちの自分自身について言語化して認識するのがむずかしい状況は、教師にとって生徒指導だけでなく、学習指導においても効果的な指導が進みにくいことにつながるだろうと思った。学習へのスタンスの取り方や課題への向かい方の基盤には、自己に対する（ある程度のも）認識があってはじめて、自分らしい課題への向かい方ができるだろうと考えるから。

現在移行措置として各学校で行われている総合的な学習の時間の研究授業風景での課題の設定が、子どもたちにとってどんなものだったかを思い出してみた。研究授

業では時間的制約もあってと思うが、その多くはすでに課題は設定されていて、子どもたちがその解決に向かいつつあるプロセスを発表していて、その課題がそれぞれの子どものためにどんな意味があるのか、手応えが伝わりにくい例もあった。今、子どもたちが一般的に物事への関心が希薄なことを思うとき、場合によっては、子どもたちが自分の課題を設定するそのプロセスを発表しあっていく機会があってもよいのではないかと思った。

教師たちによる準備段階では、それまで子どもたちに与えてきた学びからどんな知識が蓄えられているのか、情報収集の力や収集された情報がどのように子どもの中に統合されているのか、また、当の子どもたちがどのように受け止め、自分をとりまく他者との関係の中でどんな心情や疑問を持ちながら生きているのだろうかなどについて考え合い、話し合う場面があるのだろう。また、それをどのように子どもたちに投げかけることにより、子どもが考えることを通して自分に見合った課題を設定し、解決の方途を見だしていくのだろうか。当然のことながら、それは総合的な学習の時間に限ったことではないだろう。教師の大きな意図の元に、子どもたちが課題を自分の存在とのかかわりでどうとらえ、アプローチしていられるのか、研究しあうようなそんな機会をふやしていければ、教師の子どもとの通じあわなさへのヒントも得られるのではないだろうか。

前述した研究の中でとまどいを感じた後の取り組みに、教師たちによる試行錯誤の過程の報告が少なかった。教師たちの立場を考えると、子どもたちを安全に導きながら目標を達成する責務や、周囲からの評価への不安などとのせめぎ合いに負けずに、うまくいかなさをも表に出しながら試行錯誤過程を共有し、検討しあえる自由があるといい。授業やカウンセリングを通して、子どもと肩を並べながらも、子どもに大事な気づきを促せるような投げかけ方を工夫していく重要性は、教育も心理臨床も共通なのだろうと感じている。